

ジェームズ・ベリッチの「アングロ世界」分析

—— 2対の「アングロ世界」、「移住者革命」、4種のcolonization ——

細 川 道 久

1. はじめに

昨今、トランスナショナルな視点から歴史を捉えようとする動きが活発である。実際、ある特定のテーマ対象に焦点をあてて交流圏や海域といった広域世界での複合・交錯状況を考察するなど、ナショナルな枠組みにとらわれない研究成果が多数出されている。それらの中にはグローバル・ヒストリーと直結するものもあれば、それを射程に入れつつも、文字通りのグローバル（地球規模）ではなく、例えば、大西洋世界のような限定した広域世界に着目するものもある。大西洋世界については、バーナード・ベイリン（Bernard Bailyn）やデイヴィッド・アーミテッジ（David Armitage）らによる「アトランティック・ヒストリー（大西洋史）」研究が提唱・推進されている¹。特にアーミテッジによる「アトランティック・ヒストリー」の分析視角についての主張は、ローカルな社会の歴史展開を、大西洋の彼岸・此岸や大西洋をとりまく地域一帯の文脈におくとともに、それらを連関させようとするものであり²、これまでの大西洋世界に関する歴史とは一線を画している。

本稿の目的は、「アトランティック・ヒストリー」、トランスナショナル・ヒストリー、あるいはグローバル・ヒストリーの分析視角を論ずることではない。また、個別具体的テーマを通してトランスナショナルな歴史を描くことでもない。本稿の関心は、広域世界を大づかみに捉えようとする見方、具体的には、大西洋世界ないしは「アングロ世界（Anglo-World）」を俯瞰する見方に向けられる。このような見方が雑駁になることは否めないが、それは弱みであると同時に強みでもある。というのは、「西洋＝ヨーロッパ」を暗黙の前提とした「西洋史」を脱して「西洋史＝ヨーロッパ史＋アメリカ史」という認識が強まっても、ヨーロッパ史とアメリカ史を架橋する試みは依然として多くはなく、広域世界を大枠から論ずることは、そうした状況を打開する道を開くからである。先述の「アトランティック・ヒストリー」は、現状打開のための有意義な試みであるが、その分析視角をめぐる議論や個別具体的テーマの事例研究と並んで大切なのは、ヨーロッパとアメリカをトランスナショナルに大胆につないで見せる（魅せる）ことではないだろうか。

ここで問題となるのは、トランスナショナルな「つなぎ方」である。ナショナルな枠組みを初め

¹ Bernard Bailyn, *Atlantic History: Concept and Contours*, Cambridge, Massachusetts, 2005 [バーナード・ベイリン『アトランティック・ヒストリー』和田光弘・森丈夫訳、名古屋大学出版会、2007年]；David Armitage & Michael J. Braddick, (eds.), *The British Atlantic World, 1500-1800*, London, 2002. アーミテッジは、「パシフィック・ヒストリー（太平洋史）」にも関心を寄せ、2012年11月にハーヴァード大学で研究会議を主宰し、それを基に次の書を編んだ。David Armitage & Alison Bashford (eds.), *Pacific Histories: Ocean, Land, People*, New York, 2014. 次も参照。Martine van Ittersum & Jaap Jacobs, "Are We All Global Historians Now? An Interview with David Armitage", *Itinerario*, vol. 36, issue 2, 2012, p. 25.

² 和田光弘氏による整理と訳語を借りれば、①Circum-Atlantic History（「環大西洋史」あるいは「関大西洋史」）：大西洋という単位を総体として取り扱う関係史的アプローチ、②Trans-Atlantic History（「貫大西洋史」あるいは「間大西洋史」）：大西洋世界の中の比較史を重視するアプローチ、③Cis-Atlantic History（「シス大西洋史」あるいは「此岸大西洋史」）：大西洋という文脈の中で、特定の地域あるいは国（大西洋のこちら側〈立場によって新大陸側にもヨーロッパ側にもなる〉の歴史を探究するアプローチ、の3つである。和田光弘「訳者あとがき」ベイリン、前掲書、190-191頁。

からはずしてヨーロッパとアメリカをつなぐことは至難であるばかりか、一般に受容されるにはなおも抵抗があろう（もっとも、テーマ対象によって程度の差はあろう）。というのも、グローバル・ヒストリーやトランスナショナル・ヒストリーが活況を呈しつつある今日においても、ナショナルな枠組みで世界や歴史を理解する思考は依然として根強いからである。多くの人々が抱く世界史像とは、それぞれのナショナルな枠組みの歴史（ナショナル・ヒストリー）を「スクラップ・アンド・ビルド（解体してのちに再構築）」したものではなく、それらを「束ねた」ものではなからうか³。であるならば、従来からのナショナル・ヒストリーをつなぐ方が理解されやすいのではなからうか。

もとより筆者は、歴史認識・世界史像は多様であるべきと考えており、すべからくトランスナショナルな、あるいはグローバルな、と極論を述べるつもりは毛頭ない。ただ、国単位で歴史展開を捉えることに終始する姿勢は歴史世界を理解する上でやはり無理があり、しかるべき修正が必要ではないかと思うのである。従来からの歴史認識・世界史像を修正することは容易ではないが、トランスナショナル・ヒストリーの理論や分析視角に関する種々の提言はわれわれを大いに刺激してきたし、加えて、特定の対象や広域世界での複合・交錯状況に関する個々の具体的な研究成果もまた、地道ながらその役割を果たしてきたのは事実である。しかし、いま一つ必要なのは、両者の中間的形態ともいえる視点ではなからうか。誤解を恐れずに言えば、大局的なアプローチも、個別具体的な事象に特化するアプローチも、ナショナルな枠組みを「いきなり超えてしまう」傾向があり、その「過激さ」ゆえに、ナショナルな枠組みに慣れ親しんだ側の抵抗・拒絶反応すら引き起こしてしまっているのではなからうか。これら「過激な」アプローチの意義・重要性を認めた上で、より「穏健な」アプローチとして、ナショナルな枠組みに「寄り添いつつ」、つまり、それをある程度生かした形でトランスナショナルな視角を育むことも必要ではないかと考えるのである。

そこで本稿では、ヨーロッパとアメリカをナショナルな枠組みを生かした形でつなぎつつ、大西洋世界ないしは「アングロ世界」を俯瞰する見方として、これまでわが国ではほとんど扱われてこなかったジェームズ・ベリッチ（James Belich）による「アングロ世界」分析を取り上げる⁴。彼の分析は、「アングロ世界」を構成する地域のナショナル・ヒストリー（具体的には、「イギリス史」、「アメリカ史（＝アメリカ合衆国史）」、「カナダ史」、「オーストラリア史」、「ニュージーランド史」、「南アフリカ史」が対象となる）に関する実証研究の成果を踏まえており、説得力に富む。つまり、大胆であると同時に精緻でもある。また、その対象自体は「アングロ世界」であるが、他の地域や、

³ 具体的に調査した訳ではないが、筆者が学生、中高教員、一般社会人と日々接する中でこのような世界史像に出会うことが意外にも（?!）多い。

⁴ アンドリュー・ポーター（Andrew Porter）の論稿において、ニュージーランドの歴史を「アングロ世界」（同論稿ではBritish Worldと記され、「イギリス人の世界」と訳出されている）の歴史展開と結びつけた研究としてベリッチへの言及があるが、この時点では『大地を満たす』は刊行されていない。アンドリュー・ポーター「イギリス帝国史研究の現在」中村武司・林剛志訳『パブリック・ヒストリー』1号、2004年2月、45頁。したがって、ベリッチの「アングロ世界」分析を扱うのは、本拙稿がおそらく本邦初であろう。なお、次の拙著では『大地を満たす』の存在には触れている。細川道久『カナダの自立と北大西洋世界——英米関係と民族問題』刀水書房、2014年、204頁。なお、ベリッチは、2011年10月、ニュージーランドのヴィクトリア大学（Victoria University of Wellington）から、オクスフォード大学ペイト講座帝国・コモンウェルス史担当教授（Beit Professor of Imperial and Commonwealth History）および同大学グローバル・ヒストリーセンター長（Director, Oxford Centre for Global History）に就任した。

また、イギリス帝国のみならず、諸帝国のもつ種々のネットワーク（「帝国の網（巣）（webs of empire）」）とその構造に関する優れた研究成果（*Orientalism and Race: Aryanism in the British Empire*, Cambridge, 2002. など）を発表してきたトニー・バラントイン（Tony Ballantyne）は、近年、ニュージーランド史の「国際化」を精力的に進めている。Tony Ballantyne, *Webs of empire: Locating New Zealand's colonial past*, Wellington, 2012 [Vancouver, 2014].

地球規模の世界全体にも適用しうるし、ひいては、ナショナルな枠組みの延長としてトランスナショナルな分析を行なっている点で、トランスナショナル・歴史やグローバル・歴史が抱える歴史認識上の課題解決に一つの示唆を与えらると思われる。

なお、ヨーロッパとアメリカをつなぐ従来の見方として、ルイス・ハーツ (Louis Hartz) による「断片社会 (fragment society)」論が知られている。ベリッチの「アングロ世界」分析を評価する際の比較の素材として、適宜言及することにしたい。

2. 『大地を満たす——移住者革命とアングロ世界の勃興、1783～1939年』

2009年、ベリッチは浩瀚の書『大地を満たす——移住者革命とアングロ世界の勃興、1783～1939年』⁵を著した。2001年に刊行した、これまた大部の『作り直された天国——ニュージーランド人の歴史、1880年代から2000年まで』⁶では、ニュージーランドの歴史をイギリス帝国との関わりから描いたが、『大地を満たす』では、旧著でのニュージーランドの事例研究を発展させ、「ブリティッシュ・ディアスポラ (British diaspora)」ないしは「ブリティッシュ・ワールド (British World)」をめぐる議論を深め⁷、カナダやオーストラリアなどの旧白人移住植民地の歴史はもとより、アメリカ合衆国の歴史と結びつけたのである。つまり、ナショナル・歴史としての、「イギリス史」、「アメリカ史」、「カナダ史」、「オーストラリア史」、「ニュージーランド史」、「南アフリカ史」を、「アングロ世界」の下に俯瞰する見取り図を提示したのである。

上記に列挙したナショナル・歴史のうち、「イギリス史」と「アメリカ史」は、初期アメリカ植民地期研究や国際政治学における英米関係研究を主たる例外として、別個に扱われてきた。また、「イギリス史」では、国内史と帝国史の融合が比較的進んでいるのに対して（無論、イギリス史＝イギリス帝国史ではない）、「カナダ史」、「オーストラリア史」、「ニュージーランド史」、「南アフリカ史」の方は、「イギリス史」の帝国史研究の範疇に含まれつつも、それ以上にそれぞれがナショナル・歴史の視点から扱われる傾向が圧倒的に強い⁸。つまり、「イギリス史」、「アメリカ史」、「カナダ史」、「オーストラリア史」、「ニュージーランド史」、「南アフリカ史」はいずれも、程度の差はあれ、別箇のナショナル・歴史として立ち上がっているのである。それでは、それらをどのように結びつければ、イギリス、アメリカ合衆国、旧白人移住植民地（ドミニオン）諸地域の歴史を包括的に理解できるのだろうか。

以下では、まず、ベリッチによる「アングロ世界」に対する空間的理解を、ついで時間的理解を考察しよう。

⁵ James Belich, *Replenishing the Earth: The Settler Revolution and the Rise of the Anglo-World, 1783-1939*, Oxford, 2009.

⁶ James Belich, *Paradise Reforged: A History of the New Zealanders. From the 1880s to the Year 2000*, Honolulu, 2001. 同書において、既にベリッチは、カナダやオーストラリアを視野に含めた「アングロ世界」分析を展望していた。Ibid., pp. 547-549.

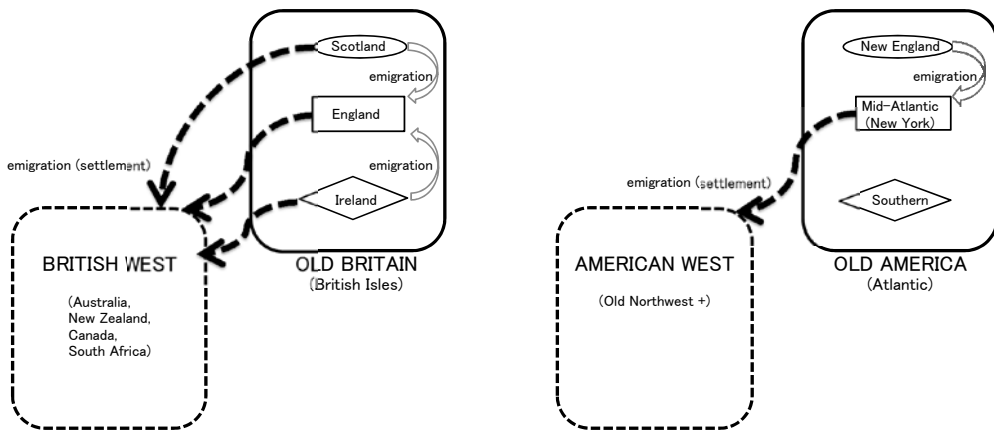
⁷ 「ブリティッシュ・ワールド」あるいは「ブリティッシュ・ディアスポラ」については、細川道久『カナダ・ナショナリズムとイギリス帝国』刀水書房、2007年、14-16頁、同『カナダの自立と北大西洋世界』、201-204頁。なお、ベリッチは、British WorldではなくAnglo-Worldを用いているが、彼も「ブリティッシュ・ワールド」論者（学派とまではいえないので、こう呼んでおく）である。

⁸ 細川『カナダ・ナショナリズムとイギリス帝国』、11-12頁。

3. ベリッチの「アングロ世界」分析（1）—— 2対の「アングロ世界」

ベリッチは、2対（2組）の「アングロ世界」の存在を示し、両者の類似性を指摘する。2対とは、Old BritainとBritish Westからなる「アングロ世界」と、Old AmericaとAmerican Westからなるもう1つの「アングロ世界」である（Old Britainは、「旧ブリテン」、「ブリテン本国」、「基層ブリテン」などと訳出してもある程度は意味をなすだろうが、それに対応させてOld Americaを「旧アメリカ」などと訳出すると誤解を招きかねないので、以下では原語のまま表記する。British West、American Westも同様である。）。

【図1】 The Two-Pair, Anglo-World



James Belich, *Replenishing the Earth*, Oxford, 2009, pp. 67-70.に基づき、筆者作成。

まずは、【図1】をみてみよう。これは彼の論考に基づき、筆者が図示したものである⁹。先述のOld BritainとOld Americaは「アングロ世界」の両メトロポリスであり、その中心をなすのがロンドンとニューヨークである。ブリテン諸島 (British Isles) にあるOld Britainの中には、シニア・パートナーであるイングランド、ジュニア・パートナーであるスコットランド、そして、スコットランドに次ぐジュニア・パートナー（セカンド・ジュニア・パートナー）であるアイルランドの3地域がある。さらにOld Britainの外側には、イングランド、スコットランド、アイルランドからの移住（入植）によって形成された諸ドミニオン (dominions) であるオーストラリア、ニュージーランド、カナダ、南アフリカがあり、ベリッチはこれらをBritish Westと呼んでいる。そして、Old BritainとBritish Westは、ブリテン側の「アングロ世界」であるGreater Britainを形成しているとする。

他方、「アングロ世界」のアメリカ合衆国側にも、Old BritainとBritish Westに相応した社会の存在を指摘する。アメリカ合衆国の大西洋岸地域をOld Americaと呼び、そこには、そのシニア・パートナーである大西洋岸中部（ニューヨーク）、ジュニア・パートナーであるニューイングランド、それに次ぐジュニア・パートナーである南部の3地域が存する。Old Americaの中心はニューヨークのある大西洋岸中部であってニューイングランドではないとして、ニューイングランド中心

⁹ Belich, *Replenishing the Earth*, pp.67-68, 70. 彼によるオリジナルな概念地図 (*Ibid.*, p.69.) も参照。

史観を否定している。さらに、大西洋岸中部からの移住によってAmerican Westが形成された（当初はOld Northwest（現在の北西部ではない）であったが、さらに西方へと徐々に広がっていった）。

このように、Old BritainとBritish Westからなる「アングロ世界」と、Old AmericaとAmerican Westからなる「アングロ世界」という、2対の「アングロ世界」の存在が指摘されるが、Old BritainとOld Americaには類似性があるという。すなわち、Old Britainのスコットランドとアイルランド、特にスコットランドは、移住指向が強い社会であり、他方Old Americaのニューイングランドも同様だとし、ニューイングランドは「アメリカのスコッチ（the Scotch of America）」だったとする。また、Old Britainのアイルランドと、Old Americaの南部は、前者がカトリックとプロテスタントの、後者はいわゆる白人と黒人の、それぞれ対立を孕んだ社会であり、両者の類似性に言及する。

ところで、先にも述べたように、ヨーロッパとアメリカをつなぐ従来の見方として、ハーツによる「断片社会」論が知られる¹⁰。1960年代にハーツらによって提唱されたこの考え方は、「アングロ世界」に加えてラテンアメリカを含む新旧両世界を俯瞰した大胆な仮説である。同仮説では、新世界の社会は、旧世界であるヨーロッパの社会から派生して形成されたとし、ヨーロッパ社会の「断片（fragment）」の違いが新世界のそれぞれの社会を特徴づけるとする。そして、この「断片」の違いは、新世界の社会が形成される際のヨーロッパ本国がいかなる社会であったのか、つまり、ヨーロッパ史のどの段階に属しているかで決まるとされる。この「断片社会」論によれば、【図2】に示すように、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、南アフリカ、ラテンアメリカにもたらされた「断片」は、以下のようになる。

封建的断片……………ラテンアメリカ、フランス系カナダ

自由主義的断片……………アメリカ合衆国、イギリス系カナダ（English Canada）、オランダ系南アフリカ

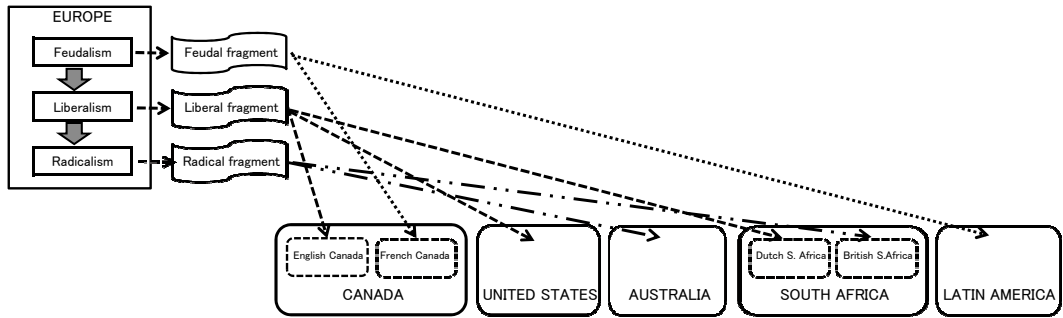
急進主義的断片……………オーストラリア、イギリス系南アフリカ（British South Africa）

換言すれば、アメリカ合衆国が「自由主義的断片」、カナダが「封建的断片」と「自由主義的断片」、オーストラリアが「急進主義的断片」、南アフリカが「自由主義的断片」と「急進的断片」、ラテンアメリカが「封建的断片」、とそれぞれの「断片」から派生した社会とされる。これによると、カナダは、南アフリカとともに、「複合断片社会（dual-fragment society）」となるが¹¹、この指摘は、

¹⁰ Louis Hartz (with contributions by Kenneth D. McRae et al), *Founding of New Societies: Studies in the History of the United States, Latin America, South Africa, Canada, and Australia*, New York, 1964.同書は、ハーツの単著ではなく、1961年1月に彼が主宰したマサチューセッツ州ケンブリッジでの会議に集った寄稿者との共同論集である。寄稿者と研究対象国は以下の通り。Louis Hartz (United States), Richard M. Morse (Latin America), Leonard M. Thompson (South Africa), Kenneth D. McRae (Canada), Richard N. Rosecrance (Australia)。「断片社会」論に関する邦語文献として、阿部斉「『断片』社会における人種問題——ラテン・アメリカ、カナダ、アメリカ合衆国の比較論的考察（比較政治分析とその方法）」『年報政治学』（日本政治学会）1971年3月、136-164頁、同「『断片社会』としてのカナダ」日本カナダ学会編『カナダ研究の諸問題』日本カナダ学会、1987年、がある。ただ、近年、「断片社会」論はほとんど取り上げられることはない。比較的最近の例として、加藤普章編『新版 エリア・スタディ入門——地域研究の学び方』昭和堂、2000年、87-88頁。

¹¹ 「断片社会」論をカナダに適用して考察したのは、ケネス・マクレー（Kenneth D. McRae）である。次の論稿では、マクレーがハーツらと考究した経緯、カナダに適用したマクレー自身の考え（フランスとイギリスによる植民地化に基礎をおく「複合断片社会」の典型例と見る）、それに対する修正・批判（Gad Horowitz, David Bell, Louis Balthazar, S. F. Wise, Seymour Martin

【図2】'FRAGMENT' THESIS



現在の「2つのカナダ」（「ケベック」と「その他のカナダ（Rest of Canada / Canada outside Quebec）」）を考える上でも示唆的である。

以上みたように、ハーツの「断片社会」論は、「アングロ世界」のみならず、ラテンアメリカも含めており、対象は広い。また、結論としては、「封建的断片」のラテンアメリカ、「自由主義的断片」のアメリカ合衆国、「急進主義的断片」のオーストラリア、「封建的断片」と「自由主義的断片」のカナダ、「自由主義的断片」と「急進主義的断片」の南アフリカ、というように、類型論に帰着しているものの、決して平板ではなく、すぐれて歴史的観点を考慮している。新世界の社会が、ヨーロッパの時代性に規定されて建設されたことを重視することで、ヨーロッパと新世界を歴史的につなぐばかりか、建設後の新世界では、ヨーロッパ本国からもたらされた「断片」のそれぞれが変化をとげて、社会の特徴を形成したとみるからである。つまり、ヨーロッパ社会から移植された「断片」が、新世界において変容する側面も考慮しているのである。ハーツによれば、ヨーロッパ社会から「離脱 (extrication)」して新世界に移植された「断片」は、ヨーロッパであれば内発的發展を促したはずだが、新世界ではいったん「萎縮 (atrophy)」したのち、「展開 (unfolding)」をとげていったとする¹²。

このように「断片社会」論は、歴史的観点を考慮した大胆な仮説であるが、大胆さゆえにやはり欠点を伴う。それは、歴史的裏づけの弱さである。例えば、アメリカ合衆国においては、ニューイングランドに移植されたピューリタニズムがアメリカニズムへと変容していくとするニューイングランド中心史観が強い点である。また、アメリカ合衆国とイギリス系カナダがともに「自由主義的断片」からなる社会として、両者の違いはないことになる¹³。

この点で、ベリッチの「アングロ世界」分析は、地域的相違を加味している。実際、彼は、ハーツの「断片社会」論がアメリカ合衆国の大西洋沿岸地域における地域的相違を軽視していると批判する¹⁴。そして、シニア・パートナーである大西洋岸中部（ニューヨーク）、ジュニア・パートナー

Lipset) に言及している。K. D. McRae, "Louis Hartz's concept of the fragment society and its application to Canada", *Études canadiennes/Canadian Studies* (Association française d'études canadiennes) n° 5, décembre 1978, pp. 17-30.

¹² Hartz, *op. cit.*, pp. 24-26. なお, extrication, atrophy, unfoldingの訳語は、阿部『断片社会』としてのカナダ、3頁、に従った。

¹³ この点に関して、「ファミリー・コンパクト (家族盟約) (Family Compact)」とロイヤリスト(Loyalists)の重なりを重視しすぎている。阿部『断片社会』としてのカナダ、8頁。

¹⁴ Belich, *Replenishing the Earth*, p. 68.

であるニューイングランドおよび南部の3地域で構成されるOld Americaとして大西洋沿岸地域を捉えることで、Old Americaの中心は大西洋岸中部であってニューイングランドではないと、ニューイングランド中心史観を否定するのである。

また、「断片社会」論ではヨーロッパ社会を歴史的段階で区切っていたのに対し、「アングロ世界」分析では、ヨーロッパではなく、Old Britainに限定して議論がなされる。これは、前者が旧世界ヨーロッパと新世界の関係が主眼であるのに対し、後者はOld Britain から広がる「アングロ世界」の把握を目的としているという違いによるであろう。

さて、既に述べたように、「断片社会」論では、ヨーロッパ社会から「離脱」して新世界に移植された「断片」が、いったん「萎縮」し、ついで「展開」すると捉えられていた。これに対して、ベリッチの「アングロ世界」分析では、「アングロ世界」はどのように変化をとげたのみのだろうか。彼による歴史的動態分析をみておこう。

ベリッチの考察は、きわめて実証的であり精緻である。既存の研究を整理した上で、2対の「アングロ世界」にある西部 (Anglo Wests)、つまり、American WestとBritish Westにあたるアメリカ合衆国、カナダ、オーストラリアおよびニュージーランド、南アフリカが、1815年から1913年にかけての時期に、それぞれ7つ、6つ、4つ、3つの好況 (boom) を経験したとする。その諸相は、【表1】にまとめられる。同表には、好況と不況 (bust) が繰り返された時期区分、地域、入植都市、好況を促した輸出品目、が示されるが、留意すべきは、それが、「アングロ世界」を構成するナショナル・ヒストリーに関する諸研究を網羅的に考察した成果であることである。旧著『作り直された天国』と同様、600頁に近い『大地を満たす』は、「イギリス史」、「アメリカ史」、「カナダ史」、「オーストラリア史」、「ニュージーランド史」、「南アフリカ史」の既存の研究を十二分に活用しており、まさに博引傍証の観がある。

以上Anglo Westsに関する歴史的動態分析につき言及したが、それだけでは、個々のナショナル・ヒストリーを並列したものとして受け取られかねないだろう。だが、彼の考察はそれに留まるものではない。次章でみるように、彼は「アングロ世界」全体を包括的かつ有機的に捉え、その変容も考察しているのである。

4. ベリッチの「アングロ世界」分析 (2)

——「移住者革命」と4つのタイプ (段階) のcolonization

ベリッチによれば、「アングロ世界」は1783年に出現した。それは、政治的には分裂しているが、文化・経済的には結びついた大陸間の世界である。そして「アングロ世界」は、「移住者革命 (Settler Revolution)」によって拡大をみせる。「移住者革命」とは、『大地を満たす』の副題にあるように、ベリッチの「アングロ世界」分析のキーワードの1つである。

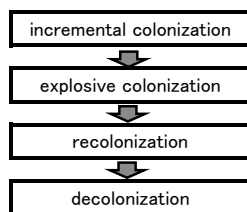
では、「移住者革命」とは何か。それは、イデオロギー変化と (当初は非工業的な) テクノロジー変化との相乗作用 (a synergy between ideological and (initially non-industrial) technological shifts) だとする。これまで「移住者革命」の存在は軽視されてきたが、近代世界を形作ってきたのは「移住者革命」とアメリカ革命、フランス革命、および産業革命が相互に影響しあったことに

【表1】 Boom, Bust and Export Rescue in the Anglo Wests, 1815-1913

		DATES	REGION	SETTLER CITY	EXPORT RESCUE
UNITED STATES	Boom One	1815-19	Old Northwest, Old Southwest	Cincinnati, New Orleans	cotton, cured pork
	Boom Two	1825-37	Old Northwest, Old Southwest	Cincinnati, St Louis, New Orleans	cotton, pork, grain, timber
	Boom Three	1845-57	Old Northwest, Midwest, Texas, California	St Louis, Chicago, San Francisco	grain, pork, gold
	Boom Four	1865-73	Midwest	Chicago	grain, pork, live cattle
	Boom Five	1878-87/93	Midwest, Far West, West Texas	Chicago, Denver, Minneapolis	grain, refrigerated beef
	Boom Six	1898-1907/13	Far Northwest, Southern California, Oklahoma	Seattle, Los Angeles	grain, timber, fruit
	Boom Seven	early 1920s	Southern California and various	Los Angeles	fruit, grain
CANADA	Boom One	1815-19/21?	Eastern Townships, parts of Ontario	Montreal	timber
	Boom Two	1829-37/42	Ontario, New Brunswick	Toronto, Saint John	timber
	Boom Three	1844-8	Ontario	Toronto, Hamilton	wheat, timber
	Boom Four	1851-7	Ontario	Toronto, Montreal	wheat, cheese
	Boom Five	1878/85-83/93	Manitoba, British Columbia	Winnipeg, Vancouver	wheat
	Boom Six	1898-1907/13	British Columbia, Prairie Provinces	Regina, Saskatoon, Edmonton etc.	wheat
	Boom One	1828-42	Tasmania, New South Wales	Hobart, Sydney	wool
AUSTRALIA & NEW ZEALAND	Boom Two	1848-67	All except West Australia and Tasmania	Melbourne, Sydney, Adelaide	wool, gold, wheat
	Boom Three	1872-79/91	Inland Victoria and New South Wales, Queensland, New Zealand	Brisbane, Dunedin	wool, wheat, meat, dairy products
	Boom Four	1887?-1913	Western Australia	Perth	gold, wool, wheat
	Boom One	1855-65	Cape	Port Elizabeth	wool
SOUTH AFRICA	Boom Two	1872-82	Cape	Kimberley, East London	diamonds
	Boom Three	1886-99	Cape, Natal, Transvaal	Cape Town, Durban, Johannesburg	gold

James Belich, *Replenishing the Earth*, Oxford, 2009, pp. 88-89, を転載。

【図3】 Four types or stages of COLONIZATION



James Belich, *Replenishing the Earth*, Oxford, 2009, pp. 177-185.に基づき、筆者作成。

よるものであり、しかも、「移住者革命」と産業革命はともに「アングロ世界」で始まり他の地域に広がったのだとする¹⁵。

「アングロ世界」で始まった「移住者革命」は、「アングロ世界」を変貌させた。ベリッチによれば、18世紀末から20世紀前半にかけて（具体的には1783年から1939年まで）の「アングロ世界」は、4つのタイプないしは段階のcolonizationを経てきたとする。その4つとは、【図3】に示すように、① incremental colonization（漸進的なcolonization）¹⁶、② explosive colonization（急激なcolonization）、③ recolonization、④ decolonization、である。ここでcolonizationとrecolonizationに対して、それぞれ「植民地化」、「再植民地化」といった訳語をあてると、colonizationのもつ意味合いが不鮮明になるため、本稿では原語のままにしておく。訳語の問題だけではない。原語であっても誤解を招きやすく、ベリッチは、あらかじめ説明を加えている。すなわち、colonizationには2つの意味がある。1つは、遠隔住民の従属（subjugation of distant peoples）であり、もう1つは、遠方への移住による自国民の複製（reproduction of one's own peoples）、つまりreproductive colonization（再現的なcolonization）である。このうち、「アングロ世界」分析で主対象となるのは後者だとする¹⁷。

さて、先述した4つのタイプないしは段階のcolonizationの中で、特に「移住者革命」によってもたらされたのが、explosive colonizationとrecolonizationであった。これによって「アングロ世界」は大きな変貌をとげたとされる。1800年頃にincremental colonizationが終わると、これに代って1815年頃から始まったのがexplosive colonizationであった。これは「人類史上最も速い、社会の再生産（再現）」¹⁸であった。北米、オーストララシア、南アフリカで人口が急増するなど、移住者が築く「アングロ世界」は拡大し、その結果、1世紀足らずの間にBritish WestとAmerican Westが形成されたのである¹⁹。

ついで、航路・鉄道・運河の整備によって両West（British WestとAmerican WestであるAnglo Wests）から両Old（Old BritainとOld America）に物資が安定的に供給されるなど、双方を隔っていた距離が乗り越えられていった。そして、双方を結びつける集合的アイデンティティが形成された。かくして、Old Britainと諸ドミニオン（つまり、British West）の間に経済的にも文化的

¹⁵ *Ibid.*, p. 9.

¹⁶ ベリッチは、'normal' decolonizationとも記述している。*Ibid.*, p. 178.

¹⁷ *Ibid.*, pp. 177-178.勿論、前者を無視できないことは認めている。*Ibid.*, pp. 180-182.

Ibid., p. 182.

¹⁹ *Ibid.*, pp. 178, 182.

にもつながったGreater Britainというトランスナショナルな世界 (entity) が生成された。それはreintegration (再統合) であり、ベリッチは、こうした動きをrecolonizationと呼ぶのである²⁰。

先に述べたように、彼はcolonizationの意味について説明を加えていたが、recolonizationについても、J・G・A・ポーコック (J. G. A. Pocock) らの批判に応える形で説明している。ベリッチは、旧著『作り直された天国』において、大量移住後の時代の中核一周辺関係の強化を意味するrecolonization²¹によって、ニュージーランドは、(必ずしも文化・社会面ではないにせよ) イデオロギー的にも経済的にもイギリスの半植民地 (semi-colony) となり、その状況は1960年代まで続いたとした²²。同地の牧産品 (羊毛、羊肉、バター) とイギリス市場との緊密な関係 (「プロテイン・ブリッジ (protein bridge)」²³) の強さや、第2次世界大戦中の1942年に太平洋ではなくヨーロッパの戦争に関与し続けようとした決定は、recolonizationの一端を示すものであり、「経済的・戦略的な依存のみならず心理的な依存を持続させて更新すらした」recolonial mentalityとみるベリッチに対して、ポーコックは、ニュージーランド人はcolonistsであり、colonizedされていないと批判した²⁴。このポーコックの批判に対して、ベリッチは、recolonizationをすぐさま搾取 (exploitation) だと捉える先入観を捨てるべきだとする。recolonizationには、reproductive colonization (再現的なcolonization) とsubordinating colonization (従属させる／支配的なcolonization) の双方があり、ここでは前者を意味するとする。そして、British WestとAmerican Westの人々がBritonsやAmericansだと自覚しているなど、Anglo Westsと従属植民地 (subject colonies) では大きな違いがあることを指摘した上で、recolonizationは、決して搾取的ではなく、アメリカ合衆国、イギリス、諸ドミニオン of the historyにおいて根幹を占めているとし、まさにこの点こそがこれまで理解されてこなかったとする²⁵。

上記のrecolonizationによって生成・発展したGreater Britainが解体していくのは、第4の段階であるdecolonizationによってであった。British Westである諸ドミニオンにおけるdecolonizationの様相は緩やかであり、かつ一様ではなかった。ベリッチは、オーストラリア、ニュージーランド、カナダの動きに言及しながら、いずれも国家としての誕生日 (national birthday) を特定できず、それらが、いつ、どのように独立 (independent) したのかは答えられないとした²⁶。ニュージーランドの動きからみれば、Greater Britainがあったのは1880年代から1960年代までの1世紀足らずと比較的短かったが、それは強大な存在であったとする²⁷。だが、このようなGreater Britainの存在、しかもごく最近までの存在を認めることは、ポーコックのようにベリッチによるrecolonizationの見方に抵抗がある者には受け入れ難いことだった。さらに重要なのは、「ニュージーランド史」、

²⁰ *Ibid.*, pp. 179-180.

²¹ 『作り直された天国』では、recolonisationを使用している。

²² Belich, *Paradise Reforged*, p. 11.

²³ J. G. A. Pocock, *The Discovery of Islands: Essays in British History*, Cambridge, 2005, p. 16 [J・G・A・ポーコック『鳥々の発見——「新しいブリテン史」と政治思想』犬塚元監訳、名古屋大学出版会、2013年、20頁。]

²⁴ *Ibid.*, p. 194 [前掲書、252-253頁。]。前掲訳書では、recolonization, recolonial mentality, colonists, colonizedは、それぞれ「再植民地化」、「再植民地的な心性」、「植民者」、「植民地化」と訳されている。ポーコックは、recolonizationという表現に対して、この訳語が与えるのと同じニュアンスを感じ取っており、この表現には抵抗があるといえる。

²⁵ Belich, *Replenishing the Earth*, p. 209.

²⁶ *Ibid.*, p. 461. カナダについては、細川『カナダの自立と北大西洋世界』、3-4頁、も参照。

²⁷ *Ibid.*, p. 472.

「オーストラリア史」、「カナダ史」といった、ナショナルな枠組みで捉えようとする従来の歴史研究者の間に嫌悪感すら惹起したことだった。ベリッチは、こうした動きを批判し、長きにわたった Greater Britain の存在をあたかも恥ずべき過去のように扱ってきたことに異を唱えたのである²⁸。

以上みてきたように、ベリッチは、両 Old (Old Britain と Old America) と両 West (British West と American West からなる Anglo Wests) の結びつきの変化を 4 つの段階 (タイプ) の colonization としてまとめた上で、その結びつきが強化される動き、とりわけ Old Britain と British West の結びつきが強まって Greater Britain が形成・発展する動きに注目した。彼はそれを recolonization と呼び、recolonization とそれに先立つ explosive colonization の両段階において「移住者革命」が果たした役割を評価したのである。

5. おわりに

ベリッチは、2 対の「アングロ世界」として「アングロ世界」を捉え、それが時間的に変化していく様相を描こうとした。2 対の「アングロ世界」という空間的理解にしても、「移住者革命」によって「アングロ世界」が拡張・緊密化していくという時間的理解にしても、壮大なスケールで論じている。しかし、大胆でありながらも、ナショナル・ヒストリーの諸成果をトランスナショナルにつないでおり、精緻さも合わせ持っている。もとより、疑問がないわけではない。筆者の関心に引きつけていえば、カナダは British West に位置づけられているが、それで十分なのだろうか。カナダ、特に東部カナダは、Old Britain のみならず、Old America の影響を受けてきた。また、西部カナダは、British West ではあるが、同時に American West でもあった。この点からすれば、2 対の「アングロ世界」という見方では、どうしても加米の相互関係は漏れ落ちてしまうだろう。とはいえ、ヨーロッパとアメリカをナショナルな枠組みを生かした形をつなぎつつ、「アングロ世界」を俯瞰する見方を大胆かつ精緻に見せた (魅せた) 強みを高く評価すべきではなからうか。

ベリッチの「アングロ世界」分析は、「アングロ世界」に留まるものではない。Old Britain および Old America と、そこからの移住によって築かれた British West および American West をつなぐ見方は、他の帝国はもとより、移住元と移住先 (ディアスポラ社会) の歴史的関係を包括的かつ有機的に捉えるのに有効である。さらにまた、「アングロ世界」の変容を促した「移住者革命」を産業革命とともに重視する見方は、「アングロ世界」以外にも適用しうる。実際、ベリッチは、「移住者革命」も産業革命も「アングロ世界」から始まったが、他地域でも同様の現象がみられたとしている²⁹。

加えて、「アングロ世界」が 4 つの colonization を経てきたとする見方は、「脱植民地化論」の再考につながるものである。4 段階目の colonization である decolonization は、de-dominionisation (脱ドミニオン化)³⁰ であるが、それは、アジア・アフリカ地域における脱植民地化 (decolonization)³¹ とどう重なりあうのだろうか。先に述べたように、recolonization に対して批判的なポーコックにす

²⁸ *Ibid.*, p. 473.

²⁹ *Ibid.*, p. 9.

³⁰ de-dominionisation という語の初使用は、Jim Davidson, "The De-Dominionisation of Australia", *Meanjin*, vol. 38, no. 2, 1979. と思われる。

³¹ 通例の用法としての (つまり、ベリッチ特有の用法ではない) 「脱植民地化」である。

れば、de-dominionisationと脱植民地化を同列に置いて考察することはありえないだろう³²。だが、A・G・ホプキンス（A. G. Hopkins）のように、アジア・アフリカ地域の脱植民地化のみならず、アメリカ合衆国の公民権運動など「国内植民地」的存在としてのマイノリティの動きなどとともにde-dominionisationを考察すべきとする主張も出されている³³。ベリッチの関心は「アングロ世界」に向けられているとはいえ、「アングロ世界」を越えた歴史研究全般に寄与しうるのであろう。

このように、ベリッチの「アングロ世界」分析は、ナショナルな枠組みを踏まえつつ、それを乗り越える視角を提示しているのである。イギリス、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカのナショナルな枠組みを越えて広がる「アングロ世界」を俯瞰するばかりか、「アングロ世界」以外の世界や歴史研究全般を捉え直す上で、ベリッチの視角は極めて示唆的である³⁴。

付記 本稿は、2010～13年度・2014年度日本学術振興会科学研究費補助金による研究成果の一部である。

³² 筆者は、カナダの事例に即して、de-dominionisationが通例の「脱植民地化論」の対象に含まれてこなかったのは、ドミニオンがイギリス帝国政策に少なからぬ関与をし帝国主義体制の一翼を担ってきたことがアジア・アフリカ地域とは決定的に異なる点とみなされてきたからではないかと指摘した（もとより、カナダでは、イギリス帝国への貢献を通して自立を図ろうとした側面が強調されているため、帝国戦争への参加を帝国主義支配への加担とする見方は希薄である）。細川『カナダの自立と北大西洋世界』、198-199頁。これに加えて、諸ドミニオンの人々はcolonistsであってcolonizedされておらず、アジア・アフリカ地域の人々とは異なるという認識が働いていることも理由に含める必要があろう。この認識は、アメリカ植民地住民は、colonistsであって、colonized されておらず、アメリカ独立革命を20世紀後半の脱植民地化とは簡単に同一視すべきではないとするアーミテージの主張と相通ずるところがある。David Armitage, *Foundations of Modern International Thought*, Cambridge, 2013, p. 213 [デイヴィッド・アーミテージ『近代国際思想の基礎（仮題）』平田雅博・山田園子・細川道久・岡本慎平訳、法政大学出版局、近刊]。

³³ A. G. Hopkins, "Rethinking Decolonization", *Past & Present*, no. 200, 2008. 細川『カナダの自立と北大西洋世界』、終章、も参照されたい。なお、次の研究は、王室・王冠などをめぐるイギリスとコモンウェルス諸国のせめぎあいを通してde-dominionisationの諸相を描いている。Philip Murphy, *Monarchy and the End of Empire: The House of Windsor, the British Government, and the Post-war Commonwealth*, Oxford, 2013. 同書の中で、「1982年のカナダの遅すぎた完全独立承認〔イギリス議会下院がカナダへの「憲法返還」を認める「カナダ法」を可決し、エリザベス女王が裁可した。これによって、憲法改廃権がカナダに移譲された〕をめぐると問題は、イギリスにとっては、1950～60年代のアジア・アフリカ諸国の独立よりも厄介な問題だったのにもかかわらず、脱植民地化の歴史の中でほとんど無視されているのは皮肉だ」との興味深い指摘がある。*Ibid.*, p. 172.

³⁴ イギリス帝国史研究における『大地を満たす』がもつ斬新さについては、次も参照。Zoë Laidlaw, "Breaking Britannia's bounds?: Law, Settlers, and Space in Britain's imperial historiography", *Historical Journal*, vol. 55, no. 3, 2012, pp. 810-815.